

原著

乳幼児の自然との触れ合いや遊びと、保育内容「健康」との関わりについての一考察 －園での生活と遊びが育み培う生きる力の基礎に着目して－

長 谷 秀 挿*

**A Study on the Relationship between Infants' Contact and Play with Nature and
Early Childhood education Content "Health"
-Focusing on the basics of the power to live that life and play in the garden nurture and cultivate-**

Hideki Hase

本稿の目的は、保育所や幼稚園、認定こども園などの保育、幼児教育の場における乳幼児の自然との触れ合いや遊び、そして生活と、保育内容「健康」とのかかわりやつながりについて、それぞれの視座、及び場面や状況に着目して、遊びを通して総合的に指導し子どもの成長・発達を促し援助する保育、幼児教育の基本原理を踏まえつつ、多角的に捉え直しをすることである。

具体的には、自然との触れ合いや遊びや生活の中で育まれ培われるさまざまな力と、保育内容「健康」とのかかわりにおける意義や重要性を改めて整理し、若干の考察を加えることである。そして、そのことを通じて、保育者の卵である保育を学ぶ学生の乳幼児の自然体験、及び園における飼育栽培活動についての意識を質問紙調査により把握し、整理及び分析して考察を加えることである。また、保育内容「健康」についての学生に対する指導のより良い在り方や、今後の課題等を探ることである。

結果、保育所や幼稚園などの保育、幼児教育の場における乳幼児の自然体験、すなわち乳幼児の園での遊びの中における自然との触れ合いや遊びや生活は、健康な心と体を育て、生きる力の基礎、土台を育み培うことには繋がり寄与することが改めて判かった。そして、保育学生への質問紙調査では、今回の対象が2年生ということもあり、自然体験、及び飼育栽培活動への重要性についてのしっかりととした認識が有ることが明らかになった。

Key words: 自然との触れ合いや遊び、生きる力の基礎、レイチェル・カーソン、飼育栽培活動

1. はじめに

保育内容の5領域「健康・人間関係・環境・言葉・表現」の1つである領域「健康」は、心身の健康に関する領域とされ、保育所保育指針¹⁾、幼稚園教育要領²⁾、幼保連携型認定こども園教育・保育要領³⁾において、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。」を全体的な目標・目的と示されている。

生きる力の基礎、土台を育み培うことが、保育、及び乳幼児教育の目的であり目標であるので、5つの領域の中でも、最も重要視しなければならない領域であるといえる。なぜなら「健康な心と身体」は、子どもはもちろん、全ての年代の

人間にとて生きていく上での土台であり、生活する上での基盤であり、まさしく生きる力の源といえるからである。

それゆえ当然のことながら、健康で安全な生活を送るために幼少期に育み培われた習慣、技能、態度などは、生涯に渡り大きな役割を担いつつ果たし、心と体の健康に多大な影響を及ぼすといえる。

自然との触れ合いや遊びなどの自然体験が豊富な子どもは、つまり毎日のように自然に触れ親しみ、自然の中で遊び生活している子どもは、そうでない子どもたちと比べると、道徳観や正義感が身についているという研究結果（2015 国立青少年教育振興機構）が公表されている。それは、子どもの主体性や能動性と相まって、自然環境のもつ

* 四條畷学園短期大学 保育学科

教育力が機能し、子どもの人格的な成長発達をもたらしたのであり、その結果ではないかと考えることができる。

ヨーロッパでは、いわゆる環境先進国のスウェーデンやドイツやフランスといった国々をはじめとして、多くの国々で子どもの教育における自然環境の意義や役割についての再評価や改めての吟味が、環境教育と併せて盛んにおこなわれている。「ビオトープ」(=ギリシャ語の「boisバイオ：生き物、命」を意味する語と、「toposトポス：場所」を意味する語とを語源とするドイツ語で“その土地や地域に固有の生物の生息する、ひとかたまりの土地や地域”を意味する)については、子どもの教育におけるその役割的重要性の観点から、さらに環境問題を考える上での意義から、幼稚園や学校でごく当たり前の教育的環境の一つとして取り入れられているのは周知の事実である。

そのような流れを受けて、アメリカや日本においても先進的な幼稚園や保育園、また小中学校において、ビオトープや自然園の設置が環境教育の取り組みと共に盛んにおこなわれるようになってきていることは、『宇宙船地球号』の将来のパイロットや乗組員となり、地球号の行く末を担うべき子どもたちにとっても嬉しい状況であるといえるのではないだろうか。

2. 研究の目的

本稿の目的は、保育所や幼稚園、認定こども園などの保育、幼児教育の場における乳幼児の自然との触れ合いや遊びや生活と、保育内容 領域「健康」とのかかわりやつながりについて、それぞれの場面、状況に着目しつつ、保育、幼児教育の基本原理である遊びを通して総合的に指導し子どもの成長・発達を促し援助することについて多角的に捉え直しをすることである。

具体的には、乳幼児の自然との触れ合いや遊びや生活と、保育内容「健康」とのかかわりにおける意義や重要性をあらためて整理し、若干の考察を加えることであり、またそのことを通して、保育者の卵である保育を学ぶ学生の乳幼児の自然体験、及び園における飼育栽培活動についての意識を質問紙調査を実施して把握し、そして整理及び分析して考察を加えることである。また、自然体験について、さらに保育内容「健康」について、

学生に対する助言・指導のより良い在り方や、今後の課題や展望、改善点等を明らかにすべく若干の考察を加えることである。

3. 自然との触れ合いや遊びと「健康」

(1) レイチャエル・カーソンとセンス・オブ・ワンダー

レイチャエル・カーソンは、著書「沈黙の春」の冒頭で、「春が来ても、鳥たちは姿を消し、鳴き声も聞こえない。春だというのに自然は沈黙している。」と警鐘を鳴らし、世界で初めて環境問題について取り上げ、とりわけ化学物質による自然破壊によって引き起こされる多くの問題を指摘した。そして、晩年において「センス・オブ・ワンダー」を著わし、子どもの“不思議がる心”、“これは何故なのだろうと疑問に思う心”すなわち、センス・オブ・ワンダーの重要性を説き、子どもの素朴な疑問や不思議に思う気持ちを大事にすべきだと訴えたのである。そして、その為には子どもの傍に寄り添い、子どもの素朴な疑問や不思議に思う気持ちを受け止めて、共感し理解しようとする、そのような大人の存在が必要不可欠であると述べている。

レイチャエル・カーソンの主張には、二つの大きな示唆があるのでないかと考える。一つは、子どもにとっての自然の大切さを強調している点である。「沈黙の春」の中でもそのことに触れているが、「センス・オブ・ワンダー」では、子どもにとっての自然の大切さや重要性を強調しているのである。そしてそこでは、自然への憧憬や恐怖、また賞賛やリスクと共に、地球と人類社会の将来を担う子どもへの愛情や、かけがえのない存在として尊重する気持ちが、彷彿としていると考えることができる。

地球上のいくつかの地域の国々では、『宇宙船地球号』で誕生した世界中の全ての子どもが享受すべき健やかに成長し発達する権利が、紛争や貧困などの原因により阻害されているような状況が残念ながら発生している。そして、先進国の中においても、社会的経済的な格差が拡大し広がる中で、同様の状況にある子どもたちも多く見受けられる。

そのような状況の子どもたちに思いを馳せると、私たち大人は無力感にさいなまれることになるが、現実を受け止め、現状を理解し、その上で将

來を展望し困難な状況を切り開き少しでも改善していく為に、目を背けることなく行なうべき必要な現状把握であり情勢の認識だと考える。だからこそ、そのなかで大切にすべきことは、「子宝」の考え方であり、「子どもは世のひかり」であるという捉え方であり、「子どもは将来の社会を担う貴重な存在」であり、将来世代として尊重すべき存在としての認識を新たにし、大人たちが共有すべきことであるといえる。

そのような考え方や姿勢こそ、レイチェル・カーソンが子どもに対して示した深い愛情や、かけがえのない存在として尊重しようとした、心持ちや心情の具体的な中身ではないだろうか。

二つ目は「感性」の大切さ、つまり感受性の豊かなことの大切さを、レイチェル・カーソンは訴えている。彼女は、人の持つ感性がその人の人生を豊かにするカギであることを繰り返し述べていて、そして自然に対する感性、すなわち自然環境に対する感受性を彼女は最も重視したと捉えることができる。

それは、子どもにとって、また大人にとっても自然は、驚きと感動の宝庫であるといえるからだと考えられる。つまりは自然の中でこそ、人の感性は磨かれるのだというメッセージを彼女は発信しているのである。それゆえに、自然を大切にして自然の中で生活し暮らすことを彼女も大にし、その貴重な時間を身近で大切な人と共にすることを楽しんでいたのである。

レイチェル・カーソンは、人の感性がその人の人生を豊かにするカギであることを教えてくれている。私たちは、彼女が示唆するように自然に対する自らの感性を見つめ直し、自然の中で、子どもと同じように自分自身にとって新しいことを発見したり、大いに感じたり、驚いたり、恐怖したり、不思議に思ったりすること、つまりは自然に対する感受性を豊かにすることを、人生の中で大切にすることが、求められているように考える。自然のなかで、そして自然と向かい合うなかで、子どもとより多く共感するためにも、そして子どもと感動をより広く深く共有するためにも、重要なことであるといえる。

(2) 自然の中での遊びや生活により育まれ培われる「生きる力の基礎」

① 「生きる力の基礎」の土台である体力が養われる

保育所保育指針の第1章総則には、1-(2)保育の目標で、「…心身の健康の基礎を培うこと。」と、明記されているが、自然の中での様々な遊びや活動による経験が、心身の健康の基礎を培うことに大きく寄与することは明々白々であるといえる。

例えば、野原を歩いたり、走ったりすることにより足腰がしっかりとし、強くなる。また、小高い丘陵をはじめ、起伏やさまざまな障害物に富んだ山道や谷川沿いを歩くことにより、さらに足腰が鍛えられ、丈夫になり、そのことと連動して体幹もしっかりとしてくることに繋がる。もちろん、同時に心肺機能が鍛えられ、血行、つまり血液の循環がよくなり代謝も促進されることは言うまでもないことである。

また、筆者自身も幼少期に経験があるのでよく分かるが、自分の背丈より高い木に登ったりする遊びや、池や川に向かって石を投げて、その距離を競ったりたりするような遊びも必ずといってよいほど誰もが経験していることである。

そのような遊びや活動も、肩や腕や腰などを主に使うことによって、それらの筋肉を中心としながら、全身の筋肉と骨格を太く丈夫にしたり、腕と脚が自由自在にしなやかに動くようにしたりすることに繋がっていることは明らかな事である。

草原や野山、そして広い田畠や河川敷などを歩き回ったり、時に走ったり、駆け下りたり、また駆け上ったりすることにより、足腰をはじめ全身を鍛えるには、これ以上は無いという表現がぴったりの運動になるといえる。そして海や小川で水遊びをしたり、泳いだりすることにより、呼吸器系の諸器官や皮膚も鍛えられることにつながる。自然の中での遊びや活動を通してさまざまな経験を重ねる中で、生きる力の基礎の中核である体力が、つまり生きる力の基礎の土台、基盤が育まれ、鍛えられていくのである。

また、これも健康のために大切な身体の機能といえるが、自然の中で種々の体験を重ねる中で免疫力も次第についてくる。自然界には様々な微生物や細菌類が存在しているが、人間の身体にとって良い働きをしてくれて免疫力、及びその機能を高めてくれるような微生物や細菌類を体内に取り込むことによって、いわゆる善玉菌が増えて、人間の身体にとって悪い働きをする細菌類を体外に

排出したり、悪玉菌の作用を抑制する働きをしてくれたりすることは周知のことである。

例えば、人の靴の下の土中には、つまり人間の足の大きさの土の中には数百万個とも数千万個とも言われる微生物や細菌類が存在しているといわれている。その中で人間の身体にとって有益な微生物や細菌類を体内に取り込むことによって、次第に免疫力がついてくるのである。

手指の清潔や手に触れる身の回りの物品の消毒、殺菌も必要なことであるが、戸外の土や砂、泥や粘土などをはじめ、さまざまな自然物に生活や遊びのなかで触れて、徐々に免疫力をつけるようすることも、乳幼児にとっては大切であり必要不可欠なことであるといえる。

②感覚器官と諸機能が育まれ鍛えられる

自然の中での遊びや活動は、乳幼児のいわゆる五感を育み涵養することに大きく寄与する。視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚、といった人間として備えるべき感覚諸機能を育み、伸ばしてくれること。もちろん乳幼児においては、これらの感覚器官である目や耳や鼻、そして舌や皮膚は、全て未完成であり成長、発達の途上であるので、その基礎が育まれ培われることになる。

視覚…海や山、草原や田畠などの広い場所で、近くや遠くを見たり、大小さまざまな大きさの物を見たりすることにより、眼球筋が鍛えられ距離や大小に応じての調整機能がよりよく働くようになり、次第に視野も広がっていくようになる。そして、空や季節折々の草花、木の葉など、さまざまな色合いの自然物を目にすることで、色彩感覚も育まれ、次第に微妙な違いにも気づくようになっていく。

聴覚…雷鳴や夕立の激しい雨音、トンビやカラスの鳴き声や小鳥のさえずり、小川のせせらぎの音や小さな虫の鳴き声など、自然界には大小また高低さまざまな音が存在する。生活や遊びの中で多種多様な音を実際に聞き、多くの経験を重ね、その経験に基づいて時に分類し、時に整理しながら記憶し覚えていくなかで、聞き分けることが出来るようになっていき聴覚の発達も促されていく。乳幼児には、身近な昆虫である種々のセミの鳴き声なども興味深いようである。

味覚…野山に自生する樹々の果実や木の実などや、蓬（よもぎ）や薇（ぜんまい）、蕗（ふき）また土筆（つくし）などの食べることのできる野草類も、美味しく食べることによって味覚の発達を促進してくれる。筆者は、小学校低学年の時に、通学路にある家の庭から伸びていた柿の樹の枝先についていた柿の実を甘いだろうと思って齧ったところ渋柿だった経験がある。実際に齧った時に、口中一杯に広がった渋みが強烈だったこともあり、その時の経験を記憶と共に思い起こすと、あれから数十年たった現在でも、感覚的な記憶が鮮明に蘇るような気がする。

嗅覚…さまざまな草花の花の香りや、それを摘んだときの茎や葉のにおい、またうっそうとした草むらのにおいや、土のにおい、そして虫の出すにおいや、カエルや魚や小さな生き物のにおいなど、自然の中でこそそのにおいが、嗅覚を刺激する。心地よい香りも、いやなにおいも、自然の中での生活や遊び、様々な活動の中で経験し学習することになる。少しのにおいでも感じ取ることができる力や、微妙な違いをかぎ分ける鋭敏さも、経験を重ねることを通して次第に獲得していくのである。

触覚…自然の中での生活や遊び、活動においては、色々なものに触れる経験も豊かに重ねることができる。土や石や水をはじめ、柔らかい物も硬い物も様々な物があるし、温かさや冷たさを感じさせる物もある。また、滑らかな手触りの物もあればザラザラした物やチクチクとした物もある。さまざまな態様の、多種多様な物に触れる直接経験が触覚を育み発達させる際においても必要となるのである。もちろん身体の部位の中で、手指が最も多くの物に触れるので、鋭敏になることは当然だが、頬や足の裏、腕や脚も重要な器官となる。

日本の気候は春夏秋冬の四季があり、その折々の季節が創り出す豊かで美しい自然のもとで、生活し遊び、そして活動する中で、日本人らしい繊細な感性も育まれる。自然の多様性（＝ダイバーシティ）のある風土、言い換えるならば、多様性

と、変化（＝バラエティ）に富んだ素晴らしい豊潤で、折々の美しさ極まる自然につつまれた風土の中でこそ、特徴的である日本的な感性（＝センス）を育み、培うことができるのだと考えられる。

③安全に遊び生活する能力が育まれる

自然の中での遊びや活動により、子どもの五感が育まれるが、同時に感覚機能が発達し鍛えられることにより安全に生活し、遊びや活動の際に怪我をしないように、また事故にあわないように気を付け、注意する能力も育まれる。

「小さな怪我（事故）が大きな怪我（事故）を防ぐ」と言われているが、子どもは小さな怪我の経験を積み重ねることにより、色々な遊びや活動における危険性やその度合いについての理解や認識、そして、その対処法や回避方法なども経験知識として日々蓄積していく。一つ一つの経験を重ねて、怪我や事故に対する生活者としての知恵を身に着けていくのだといえる。

ひと昔前の地域の子ども集団におけるガキ大将や年長の児童は、自分たちの地域における事故が起こりやすい場所や怪我が発生しやすい危険な箇所、またそれに対処するための危険を回避する行動についての知識や経験を蓄積していたと考えられる。そして、その知識や経験を次の年代や幼少児に伝えることも、リーダーとしての一つの役割や使命として担っていたのではないだろうか。そうであるが故に、集団内の年下の子どもたちからリーダーとして支持され敬われていたような側面もあったのではないかと考えられる。

（3）『共に生きる力の基礎』が育まれ鍛えられる

①言葉、語彙が豊かになる

自然是知識の泉であり宝庫であると捉えることができる。例えば、樹木や草花を取り上げてみても、林や森の規模や他の要因にもよるが、數十から百以上の種類の樹木や草花があり、その名前を知るだけでも子どもにとっては、たいした知識量となる。そして、名前と併せて特徴や生長に関わるさまざまな言葉を直接経験から生きた言葉として知るとなると、語彙の量も飛躍的に増えると考えられる。もちろん樹木や草花以外の自然物、例えば昆虫や小動物などについての知識や語彙を取り上げてみても、同じことがいえると考えられる。

②コミュニケーション能力が育まれ友だち関係が深まる

自然の中での遊びや活動によりコミュニケーション能力が育まれ、そして親しい友だちとの関係が、さらに一步深まるようなことも実際に多くある。

例えば、草花や土や小枝などを使っての「ままごと遊び」をする際には、母親役は母親らしく、赤ちゃん役は赤ちゃんらしく、というように、それぞれの役割をうまくその役柄になりきって演じることが求められることになる。のために互いに相手に要求したり、指摘したり、そして協力したり、などすることも遊びを進めるために、そして遊びをより楽しくするために必要不可欠となるのである。したがって言葉を交わすことが多くなり、相手と相互に意思を伝え合うコミュニケーション能力も随伴的に育まれることになる。

また、樹木や枯れ木、廃材やダンボールなどを用い遊びの基地をつくったり、自分たちの砦をつくったりすることも、年長児の頃になれば気の合う友だち同士の小集団でよく行なわれる活動である。その際に、友だちと話し合い相談しながら建物である基地や砦の“設計図”を描いたり、分担して必要な材料を集めてきたり、力を合わせて実際に組み立てたりなど、目的に向かって協力することを経験することにより、友だち関係が広がったり、親しさが増したり、仲良しグループとしての仲間意識が深まったりすることもよくある。

③見る目が育まれる

さまざま樹木や草花、虫や森の生き物などを、観察することにより、いわゆる見る見る目が育まれる。図鑑やDVDなどの写真や録画で見るのはなく、実際に自然の状態のなかで実物を、つまり生きた本物を見て、本物と出会って、そして色々な角度から見たり、じっと目をこらして見つめたり、時には他と比べたりして、じっくりと観察することにより、見る目は育まれる。違いの判る、物事をしっかりとよく見る観察眼の芽生えと、その基礎を培うことができることになる。

自然との触れ合いのある生活、すなわち自然体験を日常的に重ねることができる生活は、子どもたちが主体的に生きる力の基礎を育み、伸ばし拡げ、そして鍛えることが出来るからこそ、とても重要であるといえるのではないだろうか。今日の

日本社会における子どもたちの生活や遊び、活動の場や空間、環境の実際の状況を鑑みると、ますますそのことが子どもの健やかな成長発達における大きな課題となってきていると考えられる。

(4) 園での自然との触れ合いや遊び、生活について

①貴重で大切な園での自然との触れ合い体験

幼稚園や保育園、また認定こども園等での自然遊びが、現代日本の多くの子どもたちにとっては、「原体験」（＝幼少期に重ねた体験を主にいう、その人のパーソナリティ形成の根幹に影響を与える体験のこと：幼児教育心理学辞典 98P 三省堂 参照）と呼べるものではないだろうか。

それは、「飼育・栽培」に代表されるように、園内に自然環境として保育者により願いがこめられて、意図的に計画され用意された自然であるといえる。その点から言えば、人の手が全く入っていない本来の意味での自然との触れ合いとは区別すべきではないか、という議論も考えられるが、ここでは、園での生活や遊びにおける乳幼児にとっての身近な自然環境であり、自然との触れ合いであると捉えて考えることとしたい。

幼稚園や保育園、そして認定こども園での乳児期の子ども、つまり0歳児から5歳児までの子どもの自然体験について、園内での自然との触れ合いやかかわりを捉えてみると、次のようなことが考えられる。

□ 0～1歳児

- ・風、太陽の光、雨、などを感じとる。
- ・水、砂、土、などに触る。
- ・キンギョやカメなど、身近な飼育小動物を見る。
- ・草花や樹木を見る、触れる。

※保育者の仲立ちにより、身の回りの色々な自然を見たり、時に触れたりする。

□ 2～3歳児

- ・風、太陽の光、雨、などを感覚的に理解する。
- ・水、砂、土、などに触れ親しみ、使って遊ぶ。
- ・草花や樹木を見る、触れる。様々な色や形の草花や、大きさの樹々があることを知る。
- ・キンギョやカメなど、身近な小動物を見る。動きや習性を真似て遊ぶ。身ぶりや描画で表現する。アリやダンゴムシを捕る、つかまえる。

※保育者の仲立ちにより、また時によっては自發的に身の回りの色々な自然に触れ、感じ、知

る。

□ 4～5歳児

- ・風、太陽の光、雨、などを感覚的に、また経験的に理解する。
- ・水、砂、土、などに触れ親しみ、ままごとに使ったり、色々と工夫したりして遊ぶ。
- ・草花や樹木を見る、触れる。花や木の実を集めることを知り、種類や特徴などを理解する。ごっこ遊びや工作遊びなどに使ったり、色々と工夫したりして遊ぶ。
- ・チョウやトンボ、バッタやカマキリなどの昆虫やカエルやザリガニ、カメやウサギなど身近な小動物を見たり触れたりする。動きや習性を観察したり、真似をして遊んだりする。身ぶりや描画で表現する。
- ・アリやダンゴムシ、チョウやトンボ、バッタやカマキリ、カエルやザリガニなどを捕まえて観察したり、飼育したりする。

※保育者や友だちと共に、身の回りの色々な自然に触れ親しむ。また積極的に自然に関わり、飼育栽培活動を経験したり、自然物を使って遊んだり、色々な表現活動を楽しんだりする。

②自然との触れ合いや遊び、生活を十分に楽しむ

□ すもう、ままごと遊び、泥だんご作り

自然との触れ合いを心いくまで楽しむこと、すなわち自然環境の中で遊びに夢中になり没頭して遊び込むことは、子どもにとって至上の喜びではないだろうか。

例えば、公園や道端のちょっとした草むらに群生するカタバミやタンポポ、ツメクサやヨモギなどを摘んで、二人で引っ張りっこをしてどちらが強いか競う「おすもうごっこ」をしたり、“ごちそう”を作って「ままごとごっこ」をしたり、いくつも花を集めて繋いだり束ねたりして「首飾りや、冠作り遊び」をしたり、すりつぶして水と混ぜて「ジュース屋さんごっこ」をしたり、などといった経験は、団塊の世代あたりならきっと誰にでもあると考えられる。

ツツジやサルビア、またホトケノザの花の蜜を吸ったり（＝筆者がサルビアの花の蜜を吸ったのは保育所に勤務してからのことだが、サルビアの蜜は夏の盛りの花であるからかとても甘い）ビワやザクロ、そしてカキの実を採って食べたりした

経験も、団塊の世代より上の方が幼少期だった頃を振り返れば、「うんうん！あるある！」と、頷く方も少なくないのでないだろうか。

また、手だけではなく腕や顔も土や砂にまみれて、表面がピカピカになるまで一日中「泥だんご作り」に挑戦したり、そのツルツル、ピカピカの出来栄えを友だちと競ったり、といった経験は、かつては誰にでもある、といって良いほどのいわば普遍的な遊び経験であったといえる。

□捕まえること、とることが遊び

池や川でオタマジャクシや小鮎を網でくって遊んだり、早朝から樹木の上の枝で鳴きつるセミを、目を凝らすようにして探し当てて、ねらいを定めて蝉取り網で捕まえたり、暗くなるまで田畠や野原でショウリヨウバッタやトノサマバッタ、そしてトンボを追いかけたり、捕まえたりして遊びまわった自分自身の幼少期の経験を筆者も思い返すことができる。それこそ自然の中にどっぷりと浸りきって、自然を相手にした遊びに夢中になっていたことを覚えている。

そして、モンシロチョウやアゲハチョウ、テントウムシやコガネムシ、ザリガニやカエル、メダカやフナ、オケラやカメ、クワガタムシやカブトムシなど、色々な虫や小動物をとったり、捕まえたり、また家で飼ったり、等々して遊んだ経験が鮮明に思い起こすことができる。

このような遊びは、ただ捕まえること、とることが目的であり、喜びであり楽しみである遊びだといえる。

③育てる、世話を = 飼育・栽培に繋がる活動

アサガオやヒマワリを育てる活動は、幼稚園や保育園などで、年中組や年長組で経験するが多くみられる。保育者や友だちと一緒に、土を植木鉢やプランターに入れて種を蒔き、繰り返し水やりをして世話ををする初めての経験である。しばらくして種から小さな芽が出ると、誰もが喜んだり不思議がったりして、保育者や友だちとその嬉しさや感動を共有することが常である。双葉や本葉、そしてツルや茎、また花などを、それぞれの生長に合わせて観察したり、大きく育ったことを喜んだり、咲き終わった花がらやその後にできた種子で遊んだりなどした経験は、植物、つまり草花も樹木も生きていることを実感させてくれる貴重な経験であるといえる。

その経験の中で、種から芽が生え、葉と茎が次第に大きく生長し、花を咲かせて実り、種子を作り残して、やがては枯れ朽ちていくという、植物の生長のサイクルや、さらには植物の命の循環性に気づいていくことも、その後の栽培活動につながるポイントの一つだといえる。

飼育につながる活動も、幼稚園や保育園などの幼児クラスで経験することが多い。スズムシやカブトムシといった昆虫や、ザリガニやカメ、またウサギなどの小動物を保育者と子どもが世話をする事例が多くみられる。水や食べ物をやらないと昆虫や小動物は生きていけないと体験的に知っているので当番を決めて保育者や友だちと一緒に一生懸命に世話ををする子どもが多く、最初は慣れなくてぎこちなくとも、次第に上手く世話をできるようになる子どもがほとんどである。その世話ををする活動の中で、小さな生き物に接する時は、丁寧にそっと触れることや、優しく労わるように世話をすることなどを、体験的に理解し、かつ実際的に身につけていくのである。子どもたちは自分より小さくて弱い生き物の世話をする活動を通して、命には限りのあることを経験として受け止め、そして何より優しさや思いやりの心を育んでいくのである。

4. 自然体験と飼育栽培活動についての質問紙調査について

自然遊びについて、そして飼育栽培活動について指導をおこなう際には、乳幼児と一緒に遊びを楽しむこと、また共同作業者として、保育者は自分自身が自然との触れ合い遊びを楽しんだ経験や、飼育栽培活動に取り組んだ体験を思い出しながら指導を進めることも実際には多くあることである。

そしてまた、自然遊びや飼育栽培活動についての自分自身の経験が少ないような場合には、年間計画や指導案に基づきシュミレーションを行い、乳幼児と共に遊ぶ時や活動する際にはシュミレーションを思い返しながら、遊びや活動を進めることも実際にはよくあることである。

しかしながら、直接経験に基づく遊びや活動の楽しさや面白さについての実感が、やはり何よりも子どもにはよく伝わり、そして伝えることが容易であり具体的な指導や援助の際に、最も有効であることは言うまでもないことである。

実際には保育者の卵である学生が、自然遊びや飼育栽培活動をあまり経験していないのではないだろうか、つまり、保育学生の自然遊びや飼育栽培活動の実体験の減少や少なさ、換言すればいわば自然経験の貧困化が危惧される状況があるといえる。

筆者が担当する、保育内容「環境」や保育実習指導の授業内容に反映することも視野に入れて、保育学科の2年生に自然体験に関する質問紙調査を今年度の9月におこなった。その結果は次のようになり、保育学生の自然遊びや飼育栽培活動についての経験の実態と意識について現状を把握することができた。

=自然体験と飼育栽培活動についての質問紙調査=

「はい」の回答数が多数だった項目	回答数
1. 私は、自然環境の中での遊びや生活が、乳幼児にとって大切な体験であることを理解している。	63名
2. 私は、子どもが自然に触れ親しむための環境づくりの一環として、園での飼育栽培活動の大切さを理解している。	60名
3. 私は、飼育栽培活動についての基本的な知識や技術を習得することは保育者として必要なことだと思う。	59名

(結果の抜粋)

○対象：保育学科2年生65名

○概要：全10項目、2件法

○実施時期：2020年9月

質問紙調査を保育学科2年生におこない、「1. 自然環境の中での遊びや体験が乳幼児にとって大切な体験であることを理解している」かどうかを尋ねた。65名中63名、つまり約97%の学生が自然の中での遊びや生活が乳幼児にとって大切である、心身の成長に大きな影響を及ぼすと回答している。2年生であるので、学修が進みかつ実習も既に3回以上経験していることもあり、自然体験の重要性をよく認識しているといえる結果となった。

また、身近な自然環境づくりの取り組みとしての園での飼育栽培活動について、「2. 子どもが自然に触れ親しむための環境づくりの一環として、園での飼育栽培活動の大切さを理解している。」など

うかを尋ねた項目では65名中60名の学生、すなわち約92%の学生が飼育栽培活動に関して大切であると回答している。この項目についても、2年生であるので、保育実習や教育実習で配属先の園において飼育小動物（昆虫、小魚等を含む）や、栽培植物（草花、樹木、野菜等）を実際に目のあたりにし、子どもたちが飼育栽培物に触れ親しむ姿を見ているので、ごく当たり前の結果であるといえよう。

そして、「3. 私は、飼育栽培活動についての基本的な知識や技術を習得することは、保育者として必要なことだと思う。」と、尋ねた項目では、65名中59名の学生、つまり約91%の学生が飼育栽培活動に関する知識や技術を習得することの必要性を理解している回答となっている。

現代日本では都市化の進展により都市部では草原や池、小川などが失われていき、特に大都市においては子どもの身近にある自然が著しく減少、もしくは消失してしまい、地域によれば保育園や幼稚園、子ども園や小学校などを除くと、日常的に子どもたちが触れ親しむことができる自然環境が皆無であるような状況も珍しく無くなってきている。

草原や田畠、池や小川などが都市部でも残っていた頃は、子どもたちは日常的に砂や小石、草花や木の葉などの自然物を使って遊んだり、小魚や小さな生き物を捕まえて飼育したりして、自然に触れ親しむことができ、さまざまな体験を身近な自然環境の中で積み重ねることが、多少なりとも出来ていたのである。

保育者を目指す学生として、また保育者としては、乳幼児の成長発達における自然環境の重要性や自然の中での遊びや生活を豊かに経験することの大切さを、改めて深く認識することが求められる。またそのうえで、園で実際におこなっている飼育栽培活動についても、その重要性を再認識し、よりいっそう充実した取り組みとする必要があると捉えることが課題として挙げられよう。

5. 今後の課題と展望

ルソーは、著書「エミール」のなかで、子どもの最大の教師は自然であると述べている。子どもの教育で大切なことは、大人があれこれと教え込むのではなく、子ども自らが自然との触れ合い

や、自然の中での遊び、また自然への挑戦などを通じて、様々なことを学びとることを、最善の教育であるとしたのである。

「自然を観察すればいい。そして自然が示してくれる道を行くがいい。自然はたえず子どもに試練を与える。あらゆる試練によって子どもの体質を鍛える。～中略～試練が終わると子どもには力がついてくる。そして、自分の命をもちいることができるようになると、生命の根はさらにしっかりととしてくる。」⁴⁾

さらにルソーは、次のように述べている。「しかし、わたしの場合は、教育は命とともにはじまるのだから、生まれたとき、子どもにはすでに弟子なのだ。教師の弟子ではない。自然の弟子だ。教師はただ、自然という首席の先生のもとで研究し、この先生の仕事が邪魔されないようにするだけだ。」⁵⁾

このルソーの自然主義を根本的な旨とする教育の考え方は、現代の教育思想や保育の考え方にも、少なからず影響を与えていた。乳幼児と自然との触れ合いを重要視する保育・幼児教育という大きくくりで捉えるとすれば、最近では、「もりのようちえん」や、「里山保育」（さとやまほいく）といったような名称で呼ばれる園や保育も増えてきている。そして、我が国における保育・幼児教育の場においても、次第に注目を集めようになってきている。

これらの園での取り組みは、子どもたちが毎日のように草原や林、池や小川、他の自然の中で遊び、生活し、自然に触れ親しむことを通して多種多様な自然体験を日々重ねていくことにより、体力や免疫力、集中力や想像力、またコミュニケーション力を初めとするさまざまな力を、子どもたちが主体的、能動的に獲得していくプロセスを大事にしようとするものであると考えられる。

今後の課題として「もりのようちえん」など自然との日常的な触れ合いを大切にする幼稚園や保育園等の実践について、詳細な内容を把握し実践事例の収集と分類をおこなっていきたい。そして、担当の授業で学生に事例や実践について紹介し、また要点や特色、特徴などを分かり易くかつ詳細に伝えていくようにしたいと考える。そしてまた、保育者を目指して保育を学ぶ学生に、自然との触れ合い体験を学生時代にさらに広げ、深め

ることが出来るように機会をとらえて促し助言していきたいと考える。

引用文献

- 1) 厚生労働省 編「保育所保育指針」
フレーベル館 2017
- 2) 文部科学省 編「幼稚園教育要領」
フレーベル館 2017
- 3) 内閣府 文部科学省 厚生労働省 編
「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領」
フレーベル館 2017
- 4) J・J・ルソー「エミール（上）」p42
岩波文庫 1962
- 5) 同上 p68

参考文献

- 1) 高内正子 編著「保育内容 健康」
保育出版社 2008
- 2) 河邊貴子 著「演習 保育所内容 健康」
建帛社 2008
- 3) 大澤 力 編著「自然が育む子どもと未来」
フレーベル館 2009
- 4) 井上美智子・無藤 隆・神田浩行 編著
「むすんでみようこどもと自然」
北大路書房 2010
- 5) 杉原 隆・湯川秀樹 編
「保育内容 健康」光生館 2010
- 6) 高橋弥生・嶋崎博嗣 編
「新保育内容シリーズ 健康」一藝社 2010
- 7) 井狩芳子 著「保育内容 健康」萌文書林 2014
- 8) 民秋 言・梶丸武臣 著「保育内容 健康」
北大路書房 2014
- 9) 勝木洋子・日坂歩都恵・大和晴行 編
「子どもと健康」みらい 2014
- 10) 清水将之・相樂真樹子 著
「保育内容・領域 健康」わかば社 2015
- 11) 厚生労働省 編「保育所保育指針」
フレーベル館 2017
- 12) 文部科学省 編「幼稚園教育要領」
フレーベル館 2017
- 13) 内閣府 文部科学省 厚生労働省 編
「幼保連携型認定こども園 教育・保育要領」
フレーベル館 2017
- 14) 河邊貴子・鈴木康弘・渡邊英則 編
「保育内容 健康」ミネルヴァ書房 2020
- 15) 國土将平・上田恵子 編著
「子どもの姿からはじめる健康」みらい 2020

A Study on the Relationship between Infants' Contact and Play with Nature and Early Childhood education Content "Health"

- Focusing on the basics of the power to live that life and play in the garden nurture and cultivate-

Hideki Hase

Shijonawate-gakuen Junior College

The purpose of this paper is to examine the relationship and connection between infants and toddlers' contact with nature, play and life in childcare and early childhood education in nursery schools, kindergartens, accredited kindergartens and other childcare facilities, and their relationship with the content area of childcare, "health", from the perspective of each, as well as from the perspective of the situation and the situation, and to provide comprehensive guidance through play in order to promote children's growth and development. The purpose is to reevaluate the basic principles of childcare and early childhood education from multiple perspectives.

Specifically, the significance and importance of the various abilities that are nurtured and fostered through contact with nature, play, and daily life, and in relation to the "health" of childcare content, will be reassessed and some consideration will be added. Through this, the awareness of students studying childcare will be grasped through a questionnaire survey of the nature experience of infants and toddlers and the raising and cultivating activities at the nursery, and will be organized, analyzed and discussed. In addition, we explored better ways of instructing students on the "health" of childcare content, as well as future issues and areas for improvement.

As a result, it was again found that the experience of nature in nursery schools, kindergartens and other childcare and early childhood education settings, i.e., the interaction with nature, play and lifestyle during infant play, contributes to the development of a healthy mind and body, and to the cultivation of a healthy foundation and foundation of life skills. The questionnaire survey of the students revealed that the students were in their second year of school and that they had a firm understanding of the importance of nature experience and rearing activities.

Key words : The Foundations of Nature, Play and Life Skills, Rachel Carson, Breeding and Cultivation Activities